

第36回（令和5年度）

「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」

入 選 作 品 集



令和6年1月

公益財団法人小佐野記念財団

優

秀

賞

中学生の部 優秀賞

「思いやりがあふれる社会に」

甲府市立南西中学校 3年 スムサワン ミイディ

みなさんは身近に外国籍の友だちや知り合いがいますか。私の通う中学校には様々な国にルーツを持つ友人がいます。私自身もタイ人で、家では家族とタイの言葉を使って会話をしています。買い物に出かけた先や家の近所のコンビニで、日本語以外の言葉を耳にすることも多いです。

このように、私たちの周りには様々なルーツを持つ人がいます。しかし、「外国人」というだけでいじめや嫌がらせを受けているという報道を目にすることがあります。私はこうしたニュースを見るたびに、なぜ同じ人間なのに国籍がちがうだけで酷いことをするのかと不思議に思います。それと同時に、まるで自分の事を言われているような気持ちにもなります。「普段仲良くしているクラスメイトや友達も、心の中では私のことを悪く思っているのかもしれない」「外国籍の人は日本にいては駄目なのだろうか」と不安を感じてしまうのです。

外国人が受けたいじめや差別について調べると、小学校でとても酷いいじめを受けたというクルド人の少女のインタビュー記事が見つかりました。いじめが始まったのは小学校一年生の時で、クラスの半分以上の児童から名前をからかうような変なあだ名で呼ばれたそうです。校長先生の励ましで元気づけられて頑張っていたそうですが、校長先生が変わってからいじめは悪化しました。ある時は、やってもいないことをやったと言われ、みんなに暴力を振るわれたこともあったそうです。先生に相談しても「お互い様だね」と言われたといいます。私はこの記事を読み、何が「お互い様」なのだろう、これはいじめではなく暴力ではないのかと思いました。これ以外でも、国籍が違ったり、見た目が日本人と違うというだけで、多くの人がつらい目にあっているのが現実です。いじめを受けたり、嫌がらせを受けたりしている人は、常に差別や攻撃を受けるかもしれないという恐怖と戦っているのかと思うと、心が痛みます。

私は身の回りで起きている差別やいじめなどの問題に、もっと目を向けようと思います。私自身もこうした記事を目にするのは辛いですが、実際に差別やいじめを受けた本人は、もっと傷ついているはずですが、目や肌の色、話す言語がちがうとしても、みんな同じ人間です。お互いを傷つけあうのではなく、助け合い、認め合って生きていくことが大事だと思います。もしも身近にいじめられている人、差別を受けている人がいたら、勇気を出して声を掛けたいです。いじめや差別による傷を全部癒すことはできないかもしれないけれど、「味方になってくれる人がいる」という希望にはなれると思います。お互いに思いやりをもって暮らせるようになれば、目や肌の色、使っている言語にとらわれずにみんなと楽しく交流できるのではないのでしょうか。私も、周りにいる人も、みんなが笑顔で暮らせる「思いやりがあふれる社会」のために行動したいです。

「蜜蝋クリームづくりと国際社会」

北杜市立甲陵中学校 1年 越石 望心

私の通っている中学校では6月に文化祭が盛大に行われる。ダンスに劇やクイズ、ホールでは熱気に包まれていた。高校生が行っている模擬店ではお化け屋敷やメイド喫茶などが並んでいた。そんな中、ワークショップで蜜蝋クリームづくり(蜂蜜を使い、ハンドクリームを作るもの)の手伝いをした。私は来てくれた人に手順を説明したり、場所を案内したりする担当だった。まず最初に好きな臭いを選ぶところから過程が始まる。

「臭いを嗅いで好きな臭いを選んでください。」そう言うと一人だけ動かない人がいた。私と同じくらいの年齢だろうか。もう一度言ったが全く動かない。するとその子のお母さんと思われる人が早口でこういった。

「Can you speak English?」

私は啞然としてしまった。英語は授業で習っているものの、実際に英語で話す機会などなかったからだ。その上、日本語でも難しい表現をどのようにして説明すればよいのだろう。まず先程と同じように、臭いを選んでもらうことが最初のミッションだった。自分の知っている単語を最大限に使い、ジェスチャーも交えながら話した。

「Choice, Like」

手で仰ぐジェスチャーもして何とか伝えようとした。すると、それが面白かったのか笑いながらうなずいてくれた。通じた。自分の英語力のなさでは伝わらないと思っていたことが伝わり、笑ってくれたことが何よりもうれしかった。その後、自己紹介をした。彼女がしゃべっている言葉はとても早く、聞き返すことが度々あったが、そのたびに笑って優しく教えてくれた。蜜蝋クリームづくりは彼女が意外にもおっちょこちょいで苦戦することもあったが、蜜蝋クリームのおかげで彼女の色々な面を知り、仲がより一層深まった。とても満足してくれたようで、最後にはタノシカッタと言ってくれた。このうれしさはずっと忘れないことだろう。私の率直な思いは、外国人と仲良くなれたという思いだった。でもそこで大切なことに気づいた。もしかしたら私はずっと外国人という壁を作っていたのかもしれないということ。私たちは見た目も考え方も価値観も全く異なる、普段話している言葉ではない人たちを「外国人」として区別して扱ってしまいがちだ。でも外国人だって私たち日本人となんら変わらない人間だ。笑ったり、泣いたり、怒ったり。だからこそ、蜜蝋クリームで楽しさを共有できたのだと思う。これからの社会、さらにグローバル化が進み、様々な考えを持った人たちと関わる機会が多くなることと思う。国と国との関係は歴史的な問題もあるため、簡単に仲良くするというのは難しいのかもしれない。でも、大切なことは、違いを認めながら、外国人という国の壁を越えていくことだと思う。今後、そんなことを意識しながら生活していきたい。

「笑顔が永遠に続く世界をつくるために」

北杜市立甲陵中学校 3年 荻原 優和

地雷に巻き込まれて一瞬で亡くなった子ども、大けがを負った親、足を失った老人。世界では今も多くに人々が地雷という兵器に苦しんでいる。私は、今年の夏休みに地雷の除去に取り組む雨宮清さんの講演を聞く機会があった。地雷原の近くに住む現状をこの時初めて知った。

地雷は、戦争や紛争の際に埋められる。そして、戦争や紛争が終わった際も残り続ける。一見してどこにあるかはわからず、手に取ったり踏んだりした人々を傷つける。「殺すこと」ではなく「傷つけること」を目的としていて足を失ったり大火傷をしたりする人がたくさんいるそうだ。学校に通っていないせいで字が読めず危険表示に気づかず地雷に巻き込まれてしまう子どももいる。住む場所がなく、地雷原の中にある家で過ごしている人もいる。アフガニスタンやシリア、カンボジアなど世界の国々で毎年、たくさんの地雷の被害を受ける人がいる。わかっているだけで、2021年には5500人以上の人々が被害にあったそうだ。地雷の被害者の多くは、戦争に関係がない一般市民だそうだ。

そんな地雷原に住む人々を救うために雨宮さんは活動している。対人地雷除去機を開発し、今も世界の国々で使用されているそうだ。

雨宮さんお話の中で、ある写真を見せて頂いた。花や野菜が植えられた、緑で彩られた土地で笑う人々。絵を掲げ持って笑顔を見せる子供たち。それは、地雷原の近くに住む人たちの写真だった。地雷が除去された土地は数年後、花や野菜が植えられた緑いっぱい土地になっていた。雨宮さんが開発した対人地雷除去機は、地雷除去と同時に土地を耕すことができるそうだ。地雷がなくなり、耕された土地は数年後には植物が花開くようになったそうだ。写真の中で笑う人々の笑顔に胸が暖かくなった。

また、地雷除去が行われ安全になった土地では、地雷原に住んでいた人々が平和で安心して暮らせる普通の生活が始まっている。そんな中で雨宮さんはカンボジアなどの子供たちと日本の子供たちの絵の交換交流が行われたそうだ。現地の子供たちはその時が初めての画用紙に絵を描くという経験だったそうだ。また、スポーツを通じた国際交流も行われたそうだ。「サッカーボールをプレゼントすると、飛びついて遊び始めた」雨宮さんはそう語っていた。写真の中の子供たちの笑顔がとても嬉しそうだったのが印象的だった。

地雷除去活動によって豊かな大地が、人々の笑顔がよみがえった。国境を超えた協力の力で、たくさんの人々が救われたのだろう。世界中の人が雨宮さんの対人地雷除去機はウクライナにも送られることになっているそうだ。

雨宮さんのお話の中で、印象的な言葉があった。「子供たちの笑顔が永遠に続きますように。」そんなで会を作るために。国際理解・国際交流・国際協力。それらは必要不可欠だ。いつか、世界中の子どもが危険にさらされることなく笑顔で毎日を過ごせるようになることを願う。

佳 作

小学生の部 佳作

「カナダでの生活が教えてくれたこと」

駿台甲府小学校 3年 祢津 遙真

「はるま、2年後にカナダのエドモントンという所に行くから。」幼稚園の年中だったぼくにお父さんとお母さんが言いました。お父さんがべん強をしに外国へ行くことになったのです。ぼくはそれを聞いて、なみだが出そうになりました。甲府の家が大好きなのに、ひっこし、それも海外へ行くなんて思いもしませんでした。2年がたち、まず4月に、日本の小学校に入学して、たくさんの日本人の友だちができました。ぼくは友だちも小学校も大好きになりました。でも、その8月に、カナダに行く日がやってきてしまいました。まだそのころは、コロナウイルスのせいで海外旅行が自由にできない時で、やっと着いたエドモントンのホテルの中で、ぼくは甲府に帰りたくて、何回も泣きました。

でも新しく住む家が決まると、どんどん楽しくなってきました。部屋の外の木々では、時々リスがかげっこをしているのを初めて見て、かわいくてうれしくなりました。近くのお店に行くと、見たこともないフルーツやおかし、おもちゃがたくさんありました。新しいことは、こわいことではありませんでした。

少しずつ生活になれてきた9月、カナダでも小学校が始まりました。休み時間は、草が生えているグラウンドや、遊具で遊ぶことができます。カナダだけでなく、インドや中国、シンガポール、バングラディッシュ、トルコなど色々な国から来た友だちがいました。さいしょは不安だったけれど、同じ楽しみがみつかるのと、使う言葉がちがっても、いっしょに遊んでいるうちに、楽しくなってきました。オニごっこをしたり、アリをかんさつしたり、冬には雪がつもるので、そり遊びもたくさんしました。クラスの中でも、友だちと毎日話していると、少しずつジョークも言い合えるようになりました。じゅぎょうの方も、さいしょはつかれたけど、なれてくると、アートの時間で絵をかいたり、ジムの時間でダンスをおどったりするのが待ち遠しくなりました。ぼくはカナダという国も、友だちも小学校も、大好きになりました。

それから毎日があっという間にすぎて、一年半ぶりにぼくは日本にもどり、おなじ小学校に通い始めました。学校の生活はエドモントンよりいそがしいですが、日本の友だちもやさしくて、楽しくて、やっぱり大好きです。

ぼくは今も、カナダの友だちとも時々テレビ電話をします。カナダの友だちのことを考えると、つかしくて会いに行きたくなります。でも、そんな友だちともぼくがカナダに行かなかっただら、仲良くなるうとしなかつたら出会えませんでした。自分の知らない国も、言葉も、文化も、知っていくことで、友だちもふえて、楽しくなることがわかりました。

これからも色々な国を知って、たくさんの人と仲良くなっていきたいと思いました。

「ユニーク」

駿台甲府小学校 4年 高岡 結衣

私は日本で生まれて日本で4歳まですごしました。そのあと、お父さんの仕事で3年半ヨーロッパのルクセンブルクという国に住みました。その間わたしはインターナショナルスクールに通いました。

私はさいしょ英語を全ぜん話せませんでした。私は言葉が話せない人はふつう置いてきぼりにされると思います。でも実さいはちがいました。クラスメートは次つぎにわたしの国、好みなどを聞いてきて、友だちになろうとしてくれました。わたしはさいしょのころはびっくりして、きょんととして何も言えなくなることが多かったです。でも私は一年くらいたって、みんなの中ですっかりなじんでいることに気づきました。そして私は大きなことに気づきました。

ルクセンブルクは小さい国で、たくさんの国に囲まれています。だからこそ、色々な国から色々な文化を持った人がやってきます。私はインターナショナルスクールに行っていたので、クラスは英語でしたが友だちどうしは自分の国の言葉で話すのがふつうでした。例えば、フランス語、ドイツ語、イタリア語などです。服そうやはだの色、ひとみの色、かみの色、もみんな違います。話し方もちがうし、せいかくもみんな全ぜんちがいました。でもだれも取り残されたりせず、みんながなかよしでした。わたしの学校ではミュージックのクラスで使うリコーダーの色を自分でえらぶことができました。クラスメートの男の子が一人だけピンクのリコーダーをえらんだことがありました。まわりにいたクラスメートは「ピンク、ユニークだね」と言いました。男の子はきつうれしかったと思います。ユニークはみんなが目ざすあこがれの言葉だったからです。こうでなければいけないという感じはなく、みんながユニークな人になりたかったのだと思います。

人とちがう時に、おかしいと言わずに「ユニークだね」と言える事はすごいことだと思います。なぜなら、わたしたちは人からは変わったことに気づくと「おかしい」とよく言ってしまうからです。日本だと、こういとき「おかしい」という話になってしまうことが多いです。あまりユニークという考え方はしません。

人とちがう時におかしい、と教えてあげること大事です。なぜならおかしいということまわりが言わないと、おかしいままで進んでしまうこともあるからです。でも、ほかの人とちがう考え方ができる事もとても大事なことです。だから、人とちがう時におかしいといえること、ユニークとみとめることの両方を持っていることがわたしは大切だと思います。わたしはその事に気づくことができよかったです。

中学生の部 佳作

「心がつなぐ国際交流」

甲府市立南西中学校 3年 望月 凜羽

「国際交流・国際理解」。この言葉について調べる前までは、私には縁のない言葉だと感じていました。しかし、調べていくうちにこの言葉がよりぐっと身近で大切な、学ばなければいけないことだと感じるようになりました。そこで、私なりに「国際交流・国際理解」について調べ、考えてみることにしました。

まず、「国際交流」についてです。国際交流とは他国の人と交流することでお互いの国についてよく知ること、またはそのための活動を指す言葉で、留学だけでなく工業や農林水産業、医療看護に至るまで、たくさんの分野で活発に交流しているそうです。私が住んでいる甲府市では、中高生のアメリカ研修や、国際交流員の派遣などが行われています。私のクラスメイトも今年の夏、海外派遣団の一員として、アメリカのアイオワ州のデモインに研修に行っていました。研修から帰ってきた彼にアメリカと日本の違いや感想を聞いてみると、「アメリカのほうが日本より多様性を重視しているように感じた」という返事が返ってきました。彼にとって、今回の研修は新しい価値観に触れるととてもいい経験だったそうで、もっと英語や日本以外の国の文化や習慣を知ること、得られるものがたくさんあるということに気づくことができました。

次に、「国際理解」について調べてみました。国際理解・国際理解教育とは1947年にユネスコが提唱したもので、「世界の人々が、国を越えて理解し合い、協力し、世界平和を実現すること」を理念とした教育のことだそうです。山梨県では、国際理解促進支援事業が行われていて、小・中・高等学校・短期大学・大学等の教育機関、県・市町村等の研修機関、生涯学習関連機関、国際交流団体等が国際理解教育として実施する授業又は行事に国際交流員を派遣しているそうです。この事業では、海外の自然環境や日常生活・食事・学校の様子などをテーマとして扱っていたりしているといいます。こうした活動がもっと盛んになれば、国際理解が深まると思います。

インターネットや情報技術が普及している現代、どんなことも簡単に調べることができます。また、自動翻訳とった便利なサービスも数多くあります。これらのサービスは私たちの暮らしやコミュニケーションをととも豊かにしてくれますが、自分から多言語を学ぼうとする意欲が減ってしまうのではないかと心配になります。コミュニケーションを豊かに、便利にするためには、翻訳サービスを活用することも大事です。しかし、根本には、「相手の事を理解しようとする気持ち」が不可欠だと思います。言葉が全て伝わらなくても、間違いを恐れず、心と心の触れ合いを増やしていくことが、お互いを知る一歩になるのではないかと考えます。これから、「国際交流・国際理解」を大切に、学びを続けていこうと思います。

「人と人の繋がりを大切に」

甲府市立南西中学校 3年 池田 莉子

私はこの夏、甲府市が行う海外派遣団の一員として、甲府市と姉妹都市になっているアメリカのデモイン市に行った。派遣団の一員として夏休みにアメリカに行くことが決まった後、初めて海外に行く私の頭の中は様々な想像でいっぱいになった。「アメリカは人が多そうだ」「日本より大きな建物がたくさんあるのだろうか」「どんな人が暮らしているのだろうか」…想像がどんどん広がり、ワクワクした気持ちがどんどん募っていった。多少の不安と緊張を感じてはいたが、それよりもはるかに楽しみの方が強かった。

10日間の研修は発見と驚きの連続だった。私が最も驚いたことは、アメリカの方々のフレンドリーさだ。レジに並んでいるときや街を歩いている時、私はよく話しかけられた。日本で暮らしているときは経験しなかったことだ。私がスーパーで初めて話しかけられた時、とても慌てた。しかし、私が慌てていることに気づいた相手は、はじめよりやさしい英語で話しかけてくれた。それに対して私が言葉を返すと「Nice」「Good」「Perfect」と言いながら、笑顔でハイタッチをしてくれた。そのおかげで私も自然と笑顔がこぼれた。他にも私がアメリカの人々のやさしさに感動した出来事がある。スーパーで買い物をした時のことだ。私が支払いに必要なお金がわからなくて困っていると、店員さんが「見せて」と声を掛けてくれた。小銭を見せると支払いに必要な分だけを「this, this」といいながら丁寧に取ってくれた。サポートを受けて支払いを終え、私が「Thank you」と伝えると「Yes! Yes! Have a nice day」と弾けるような笑顔で言ってくれた。私のアメリカに対する印象は、10日間の研修で「笑顔があふれる国」になった。

アメリカは他国との交流が盛んだそう。実際にデモイン市の建物の中には色々な国の国旗が飾られていた。教育長さんも「デモインはたくさんの方々と交流をしている。」「アメリカは人と人の繋がりを大切にする国」と話していた。10日間の研修期間で、私はこの言葉の意味を体感した。私が出会ったアメリカの方々はみんな、私に対して笑顔で接してくれた。慣れない環境での生活だったにも関わらず、私が嫌な気持ちになることは1度もなかった。「国際交流とは何か」そう聞かれると、難しくて自分にできる事は何もないと思ってしまう。しかし、自分の経験を振り返って考えてみると、国際交流のキーワードは「繋がり」だと感じる。

アメリカの人々は、私たちが喜んで受け入れてくれた。文化や宗教、習慣、話す言語がちがっても、相手の事を思い、受け入れようとする姿勢は相手を笑顔にすることができる。この夏の経験を活かして、私はこれから「繋がり」を大切に、色々な国の人と交流を深めていきたい。

「飢餓問題で私たちにできることは」

甲府市立南西中学校 3年 小林 陽和

あなたは現在、深刻な問題になっている飢餓を知っていますか。飢餓によって苦しむ人は増え続けており、世界全体で考え解決していかなければならないと思ひ、調べてみることにしました。

はじめに、飢餓には「突発的な飢餓」と「慢性的な飢餓」の2種類があるということを知りました。戦争や災害によって食糧が不足することで発生するのが「突発的な飢餓」です。一方、「慢性的な飢餓」は政治や経済、農業の生産性などが原因になって起きる飢餓のことです。私はこの2つの飢餓のうち、「突発的な飢餓」に注目しました。

私は、現在の日本は飢餓に苦しむ人が少ないと思っていました。しかし、実際に調べてみると、日本でも飢餓に苦しんでいる人が約235万人いるということが分かりました。私の通っている中学校では、給食の時に食べ残しが多く出ることが課題として挙がっています。日本は世界的に見ても非常に食品ロスが多い国だという話を聞いたこともあります。食べ物が必要以上にあふれている現代の日本で、これほど多くの方が飢餓に苦しんでいるということに私は驚き、ショックを受けました。日本の現状を知った私は、世界に目を向けて調べてみることにしました。すると、世界では、9人に1人の割合で約8億人もの方が飢餓に苦しんでいるそうです。しかも、飢餓に苦しむ人は3年連続で増加しているといひます。そこで私は、なぜ飢餓が増加傾向にあるのか、調べてみました。国連が発表した「世界の食糧安全保障と栄養の現状」によると、10年以上減少傾向にあった飢餓人口が増加に転じたのは、紛争が主な原因である、と報告されました。さらに、飢餓人口はおよそ、8億1,500万人で、そのうち4億8,900万人が紛争のある地域で生活しているという状態だということもわかっています。

私は、なぜこのように、飢餓で苦しむ人が減らないのか考えてみました。1つ目の原因は、増加傾向の原因でもある紛争による食糧不足だと思います。紛争が起きると、家や農地など全て捨てて避難しなければ、なりません。避難せずに残ったとしても、危険なので農作業や仕事をするのができなくなります。このことにより、食糧の確保が困難になり、飢餓状態に陥ってしまうと思います。

次に私は、私自身に何ができるのかを考えてみました。私の力だけではあまり変わることがないと思いますが、私は、募金活動が何より大切なことだと思います。私1人ではできる事は限られていますが、たくさんの方々と協力していくことで救える命もあると思います。

私は今まで「貧困」や「飢餓」という言葉をあまり身近で聞かなかったので、今回この文を書く中で、いろいろな問題や解決策について考えることができました。世界中が、平等な生活を送る為にも1人1人の何気ない努力が大切だと思います。

第36回（令和5年度）
「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」
優 秀 作 品 集

令和6年1月 発行

発行者：公益財団法人小佐野記念財団
山梨県甲府市丸の内一丁目6-1
(山梨県知事政策局国際戦略グループ内)
TEL055(223)1435